

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年8月18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科

職 名・学 年 特別研究員

氏 名 安 井 大 輔

助成の種類	平成25年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	アメリカ社会学会 2013年度大会 (American Sociological Association 2013 Annual Meeting)		
発表題目	Internalization of Ethnicities through Food		
開催場所	アメリカ合衆国・ニューヨーク州・ニューヨーク市・Hilton NY & Sheraton NY		
渡航期間	平成25年 8月 7日 ～ 平成25年 8月17日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	円	
	助成金の使途内訳	渡航費	: 181,130円
		宿泊費(一部)	: 18,870円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 人文社会科学系の研究者を対象を含む助成がきわめて少ないなかで、こうした機会をいただけたことは大変ありがたかったです。本当にありがとうございました。		

成果の概要／安井大輔

学会の概要

筆者は、2013年8月に American Sociological Association(アメリカ社会学会:略称 ASA)の Annual Meeting 2013 に参加した。ASA は主にアメリカ合衆国の社会学者が集う学会であるが、合衆国以外の出身の社会学者も多数加入している。会員数では世界の社会学会のなかでも最大規模であり、実態としては合衆国にとどまらないグローバルな社会学会となっている。

ASA は毎年アメリカ合衆国国内各地で Annual Meeting と称する定期大会を開催している。定期大会は、研究分野ごとに分かれた部会から構成されるが、そのなかでも筆者は Migration 部会に所属している。移民は合衆国では歴史的にも長く重要な研究対象であったが、現在では国際的な人々の移動の増加を受けて、移民研究は各国の社会学共通の研究分野となっている。そのため、近年は ASA でも合衆国への入移民だけでなく、世界各国の入/出移民を取り上げることが増えている。

筆者は同部会が移民の家族やコミュニティを対象とする研究を対象に設定した " Immigrant Communities/Families" というセッションで、発表を行った。

発表の概要

現在の日本では、沖縄や朝鮮半島出身のオールドカマー移民居住地に日系ブラジル人をはじめとしたニューカマーなど異なる移民が同じ空間に居住し、各地に異なる文化を持つ移民混雑地域が生まれている。この多文化化が進む日本の地域社会でどのように文化の再創造と再整理が行われているのかを探求するのが筆者の研究の目的である。移民の文化活動に注目する研究は、行政を中心とした多文化共生政策など公的なものが多かったが、これらの研究に対し筆者の研究では私的な生活世界に注目し、食という人々の日常的な営みに焦点を当てている。

このように筆者の研究発表は、移民という国際的なヒトの移動現象を「食」という日常的な実践の視点からとらえ、ホスト国とゲスト移民の接触により生じる食文化の変容と生成を比較社会的に考察するものである。従来の移民と食文化をめぐる研究では、「食」は、自らの民族的アイデンティティを表出し排他的に自集団を純化するある種の固定的な資源としてみなされてきた。(ここで述べる「食」とは、食べる行為、食べられる食物と料理、食べることについての思想や宗教などを含む総合的な概念である。)だが、グローバル化の進展とともに多文化化しハイブリッド化していくなかで異なる他者との間に共同的な意識を創出する性質ももっている。この「食」がどのように位置を変化させてきたのかを探求することは、現代世界の社会・文化研究にとってもきわめて有意義なものである。

こうした問題意識のもと、筆者は横浜市鶴見区にある多文化コンタクト・ゾーンを対象に調査を継続している。筆者が対象としているのは、日本あるいは沖縄からいったん南米

に移住した人々の子や孫が 1990 年代以降、日本に出稼ぎにやってくることで鶴見区に形成された多文化状況である。鶴見区は戦前から沖縄や朝鮮半島の出身者が多く居住していたが、彼らの来住によってより複雑でダイナミックなマルチエスニック状況が生まれている。発表では、上述の地域で行ってきたインタビューと参与観察で得られたデータをもとに、現代日本の多文化地域に生きる移民の食と彼らのエスニック文化(エスニシティ)の関係について報告を行った。

報告では、対象地域に暮らす人々の食とエスニシティを「社会」(移民の送り出し元と受け入れ先の国や地域)「状況」(いつどこで誰と食べるかの相互行為)、「歴史」(親子の間で継承される記憶)の 3 コードの束として整理した。その上で、食の好みの違いに基づき、移民の各段階におけるエスニシティの生成と変化について論じた。

学会の成果

衣食住という生活文化の中心に位置する食文化から、人の移動を分析する研究は、残念ながら日本の社会学では十分には認知されていない。しかしながら移民先進国である合衆国を筆頭に欧米の社会学会には、Food Sociology を標榜する研究者の数も多く、理論や事例の蓄積も進んでいる。それゆえに今回は世界規模での社会学会に参加することで、一流の食の社会学研究者たちとディスカッションし有意義なアドバイスをいただくことができた。

さいわい筆者の報告に関しては、セッションの司会から日本の研究ではこれまでなかった珍しいマルチエスニック地域のエスニシティを多面性、本質主義性、流動性などの交錯するアリーナとして描き出す先駆的なものと評価していただいた。

その際、会場フロアからのコメントでは沖縄や朝鮮半島の食文化の日本における位置づけや階層やジェンダーとの関係にも注目していくことの重要性が指摘され、今後の調査研究のアドバイスとすることができた。またセッションを聞きに来ていたニューヨーク市立大学の大学院生から発表について多くの質問をいただき、セッション終了後も長時間、エスニック文化の継承について議論を重ねることができた。大学院生の彼女とは学会終了後にも論文を送り合うなど交流が続いており、今後の研究進展に不可欠な研究者ネットワークを構築することができた。

学会大会の WEB サイト

American Sociological Association 2013 Annual Meeting

<http://www.asanet.org/am2013/am2013.cfm>